

< 書評 >

リチャード・レイン氏所蔵近世文芸作品コレクション

やす だ ぶん きち
安 田 文 吉

(文学部助教授)

まえがき

最近、俄に近世の絵本が注目され始めている。例えば「初期上方子供絵本集」(「貴重古典籍叢刊13」岡本勝著、昭和57年2月刊 角川書店)、「近世子どもの絵本集 江戸篇・上方篇」(鈴木重三・木村八重子・中野三敏・肥田皓三編、昭和60年6月刊 岩波書店)など子供絵本集の出版が相次いでいるほか、古典籍大入札会でも赤本・青本・黒本が数多く出品され高値をよんでいるようである。これらの近世絵本はかつては、図書館の分類でも雑書とされ、俗に言えば十把一からげとして扱われ、ほとんどがかえりみられることなく書架の片隅で埃をかぶっていた存在であった。最近これらの絵本が注目され始めたのは、その文芸性が見直されてきたからである。

このような時期に、本学図書館では、黒本・青本を中心とした、リチャード・レイン氏の近世文芸作品コレクションの一部を、文部省の補助金を得て購入することができた。リチャード・レイン氏は、日本文化、特に浮世絵を中心とした近世日本絵画の研究をしており、その方面の研究論文も多い。最近、リチャード・レイン氏は「浮世絵百科図典」(原題“IMAGES FROM THE JAPANESE PRINT INCLUDING AN ILLUSTRATED DICTIONARY OF UKIYO — E”)を刊行された。これは、レイン氏の浮世絵研究の総まとめ的なもので、その研究の基礎資料となったのが、これら浮世絵や絵本を初めとする近世文芸作品コレクションであったと思われる。

る。したがって、レイン氏は、その資料蒐集において、厳しく吟味されていた筈であり、その資料的価値は高いと考えられる。最近レイン氏のコレクションの1部が東京古典会主催の古典籍大入札会に出品されたとの情報があり、その行方が大いに注目されていたが、はからずも今回、その1部を本学に収めることができた。このような文献資料は、簡単には手に入れることができない。というも、いくら資料があっても財力がなければ購入できないし、財力があってもものが無ければ手に入れることはできない。今回はその点では非常に上首尾であった。近世の子供絵本が注目され始めた時に、その研究者の一人であるレイン氏の研究資料を購入できたことは、時宜にかなったことであった。以下、本学購入の近世文芸作品コレクションの概要と特色を述べていくことにする。

概要

本学図書館に収められた近世文芸作品コレクションの概要は次の通りである。

黒本	20点
青本	13点
黒本、青本の判別が不能なもの	1点
丹緑本	2点
絵本	6点
仮名草子	3点
浮世草子	2点
芝居絵番付	36点
富本・長唄正本稽古本	29点
その他	1点
計	113点

次にこれらの大別にしたがって、個々の書名と冊数を記す。猶、各資料の書誌学的調査の報告は、稿を改め、昭和61年度の「南山国文論集」(第11号)に載せる予定である。

黒本

- 「そが一代記」 5巻5冊
- 「かうぎでん(弘徽殿)」 2巻2冊
- 「ものぐさ太郎」 2巻2冊
- ◎「ほう命丸白狐玉」 3巻3冊
- ◎「藤戸問答」 2巻2冊
- ◎「熊坂誕生話」 2冊(下巻欠)
- ◎「恵方福人揃」 3巻3冊
- ◎「万穀誤(ばんこくしろねずみ)」 2巻2冊
- ◎「歌うら伝」 5巻5冊
- ◎「角力物語」 2巻2冊
 - 「弁慶分身石」 3巻3冊
 - 「黒丸合戦」 5巻合1冊
- ◎「鉢敲濫觴」 3巻3冊
 - 「童子が松」 2巻合1冊
- ◎「兼好法師草枕」 2巻合1冊
- ◎「結城合戦」 3巻3冊
- ◎(「とをる」) 3巻3冊(題簽剥落)
- ◎「熊野篠懸」 3巻合1冊
- ◎(「大ふくてふ」) 2巻合1冊
 - (「為朝一代記」) 5巻合1冊

青本

- 「三鼎金王桜」 3巻3冊
- ◎「和唐内稚立」 2巻2冊
- ◎「豊年福太郎」 2冊(下巻欠)
 - 「栄花物語」 9冊合1冊(第1巻欠)
 - 「吉野内裏」 2巻2冊
 - 「新天神(記)画づくし」 10巻合1冊

- 「丹頂鶴」 1冊（上巻欠）
- 「朝比奈日記」 3巻合1冊
- ◎「色紙百人一首」 3巻3冊
- 「夜道千人力」 2巻合1冊
- 「忠孝二代楠」 5巻5冊
- ◎「化物親玉盡」 2巻合1冊
- ◎「正夢出世門」 3巻合1冊

黒本・青本判別不能のもの

- ◎（「三国志」） 10巻合1冊

丹緑本

- 「曾我物語」 巻4～巻11（8冊）
- 「義経記」 8巻8冊（取合本）

絵本

- 「青楼年中行事」 2巻2冊
- 「画本 福寿海」 1巻1冊
- 「戯場楽屋図会」 1冊（下巻のみ）
- 「劇場画史」 2巻2冊
- *「画本 宝能縷」 1冊
- 「俳優三階興」 2巻2冊

仮名草子

- 「因果物語」 6巻2冊
- 「杉楊枝」 5巻合1冊
- 「新うす雪物語」 5巻5冊

浮世草子

- 「傾城色三味線」 第3巻（1, 2巻欠）
- 「世間娘氣質」 6巻合1冊

芝居絵番付

- ◎（「結城座上り絵番付」） 1冊（第6丁～第10丁）
- （「芝居絵番付」） 35冊（上方版）

富本節・長唄正本稽古本

- 「在姿浄瑠璃世界」他 10冊（29曲）

その他

- （「元祿雛形本」） 2冊（題不明）

特色

これら近世文芸作品コレクションの特色の第1は、黒本・青本等近世絵本のコレクションとしてまとまったものであるという点である。近世絵本のまとまったコレクションとしては、東洋文庫・岩崎旧蔵本、都立中央図書館加賀文庫、大東急記念文庫、慶応義塾図書館、東北大学図書館狩野文庫、名古屋市博物館蓬左文庫尾崎久彌コレクション、大阪府立図書館などが主なものである。今回本学図書館に所蔵された絵本類は42点で、それらと比較すると、その規模は決して大きいものではないが、その内に34点に及ぶ黒本・青本が含まれていることは、全国的に見ても注目に値するものである。しかも、これらの内で黒本13点・青本5点・いずれとも判断できない1点の計19点（前項書名の頭に◎印を付したもの）が、他に現存を確認できない貴重なものである。なかでも、「熊坂誕生話」「恵方福人揃」「歌うら伝」「角力物語」「兼好法師草枕」「熊野篠懸」（以上黒本）、「和唐内稚立」「色紙百人一首」（以上青本）といったものは、『國書総目録』や『日本小説年表』にも書名の見えない、本の存在さえ未知のものなのである。また、「万穀譚」

「鉢敵濫觴」（以上黒本）、「豊年福太郎」（青本）は『國書総目録』等に書名のみは掲げられているが、実体のほとんどわからなかったものである。さらに、前項の書名の内、（ ）を付して示したものは、表紙の題簽あるいは絵題簽が剥落しており書名の不明なもので、柱刻等により仮に付した書名であるが、詳細な調査を施せば、あるいはこれらも前に示したような未知の作品に加えられるかも知れないのである。このように、本学のコレクションは、近年関心の高まりつつある絵本や挿絵入り版本の研究に新たな資料を提供することのできるものなのである。

また、この近世文芸作品コレクション中には、ゴンクール、ブルティ、ジバル等と言った外国人日本研究者の旧蔵になるものがあることも興味深い点である。一度外国人の所蔵となり、貴重な文献が海外に流出するところを、今度本学図書館の所蔵となったことによって、再び我が国に留められることとなったことも意義あることであるが、これらの外国人研究者はいずれも文献資料に造詣の深い人物であり、その所蔵書には珍本・善本が多いのである。特にエドモン・ド・ゴンクールは浮世絵の研究で知られているが、その著『青樓畫家歌麿』を出版するに際して、「未だ嘗て何人の先駆者をも見なかった事物や人間に関して、新しい研究を進めるといふことは非常に魅力ある仕事である。すべての人々に先立って、私は仏蘭西革命と五執政官政府との風俗史を作ったが、それは私にとって非常に興味であった。また殆どすべての人に先立って、私は18世紀の女性と事物との内的歴史を作ったが、それも私にとって非常に興味であった。それ故、私がこんなに老いたに拘らず、私の新しい事物に対する好奇心は、「人間の世紀」即ち地球の人類に存する人間的な世紀の為に日本の美術史を試みることに私を引摺って行ったのである。その研究、参考資料の点に就いては、私が前に仏蘭西の18世紀及び革命に対する精神的な又芸術的な歴史を書いた時と、殆ど同様に純粋なものであるといい。」（野口米二郎訳著『ゴンクールの歌麿』序文より引用）と述べているように、単なる日本趣味や珍奇な興味によって作品を収集したのではなく、確かな目的と批評眼を持って研究資料として文献を収集したのである。従って、これらの旧蔵書は美術史あるいは文芸史的に見ても有益な

のが多いと言えよう。

その他、本コレクションについての注目される点について、もう少し挙げてみる。まず、前述した黒本・青本以外の絵本類にも貴重なものが多く含まれている。例えば、丹緑本であるが、丹緑本はそれ自体が出版時期の限られた資料的にも興味深いものである。本コレクション中の2点は、「曾我物語」と「義経記」で、丹緑本の中でも最も出版が少なかったと思われる軍記物であり、特に、「曾我物語」は破本ではあるが、出版時期も享保期と推定される非常に珍しいものなのである。また、「青樓年中行事」は享和4年刊の上下2冊のものであるが、歌麿画で当時の遊廓の風俗を知ることのできる貴重なものである。前述のゴンクールが、『青樓畫家歌麿』の中で、この本について次のように記している。「『青樓年中行事』に墨摺本が数冊現存している。私はその1冊を持っている。これは恐らく歌麿並に校合門人等が手づから着色するために刷ったもので、勿論その印刷部数は極めて少ないものである。」（同じく野口氏の訳著より引用）この「青樓年中行事」は普通見られるものは色摺で、右の文中にも述べられているように墨摺のものはほとんど見られないのであるが、本コレクションのものはまさに数少ない墨摺初刷のものである。本書はゴンクールの蔵書印はないので、文中に見えるゴンクールの所蔵書そのものではないであろうが、その価値は自づと知れよう。さらに、「画本 福寿海」「画本 宝能縷」も珍しいものである。特に「画本 宝能縷」は天明6年刊の蚕養図会で、当時の養蚕風景を伝える貴重な風俗絵である。

絵本類以外の資料にも有益なものがある。例えば、富本節・長唄正本稽古本の内、「長字多寄本」に合綴された作品はどれも珍しいものであるが、中でも「七小町容彩四季」（なゝこまちすかたのさいしき）は注目すべきものである。これは、文化13年中村座で中村松江七変化の内として初演された時の正本であるが、表紙絵には5様の小町姿が描かれ、中央に「歌麿画」とある。すなわち、この本の表紙画は歌麿筆になるということであるが、歌麿はこの正本刊行より10年も前の文化3年に死没しているのである。従って、この絵は歌麿がこの正本のために描いたものでないことは明らかであるが、あるいは何かの歌麿画から再録して正本表紙とした可能性もあるので、この

表紙については十分な検討が必要である。もしこれが本当に歌麿画の再録であることが明らかになれば、浮世絵と正本表紙の関わりについて美術的にも芸能史的にも貴重な資料を提供することになる。しかし、歌麿がこのように正本の表紙絵を描いたという記録、資料はほとんどないし、また、こうした正本表紙に絵師の名を記すこともほとんどないことであるので、「歌麿画」は偽の記述であることも十分予想されよう。その場合でも、この正本がこうした有名な絵師の名を刷り込んだ意味について、興味深い問題を残すことになる。いずれにしても問題の多い文献である。また、「結城座上り絵番付」は、僅かに第6丁～第10丁という破本1冊のみであるが、黒本仕立という珍しいものである。結城座は江戸葺屋町市村座の向こう側に開場していた人形浄瑠璃劇場で、後には両国米沢町に移転しているが、江戸浄瑠璃の草分け的存在であった。江戸浄瑠璃に関する資料は比喩的少ないので、その点でも貴重なものであるが、絵番付が黒本仕立になっていることはさらに注目すべきものである。普通絵番付は表紙も絵で飾られており、これはあるいは黒本最盛期にその影響を受けて、絵本類と類似した形で作られ、享受されたものであろうか。絵本とこうした絵番付の関わりを窺わせる興味深い資料とってよかろう。

まとめ

以上述べてきた如く、本近世文芸作品コレクションは、点数から見れば小規模なものであるが、その中には孤本、稀覯本あるいは善本が多く、資料的価値の高いものである。前項で紹介した絵本類の他、仮名草子の代表的作品である「傾城色三味線」「因果物語」「杉楊枝」「新うす雪物語」「世間娘氣質」等も含まれており、さらに、浄瑠璃・歌舞伎等の演劇資料、江戸時代風俗資料等も含まれているので、前述した如くに近世文芸研究に新資料を提供すると同時に、基本的な近世文芸研究の資料としても有効な役割を果し得る有意義なコレクションとすることができよう。